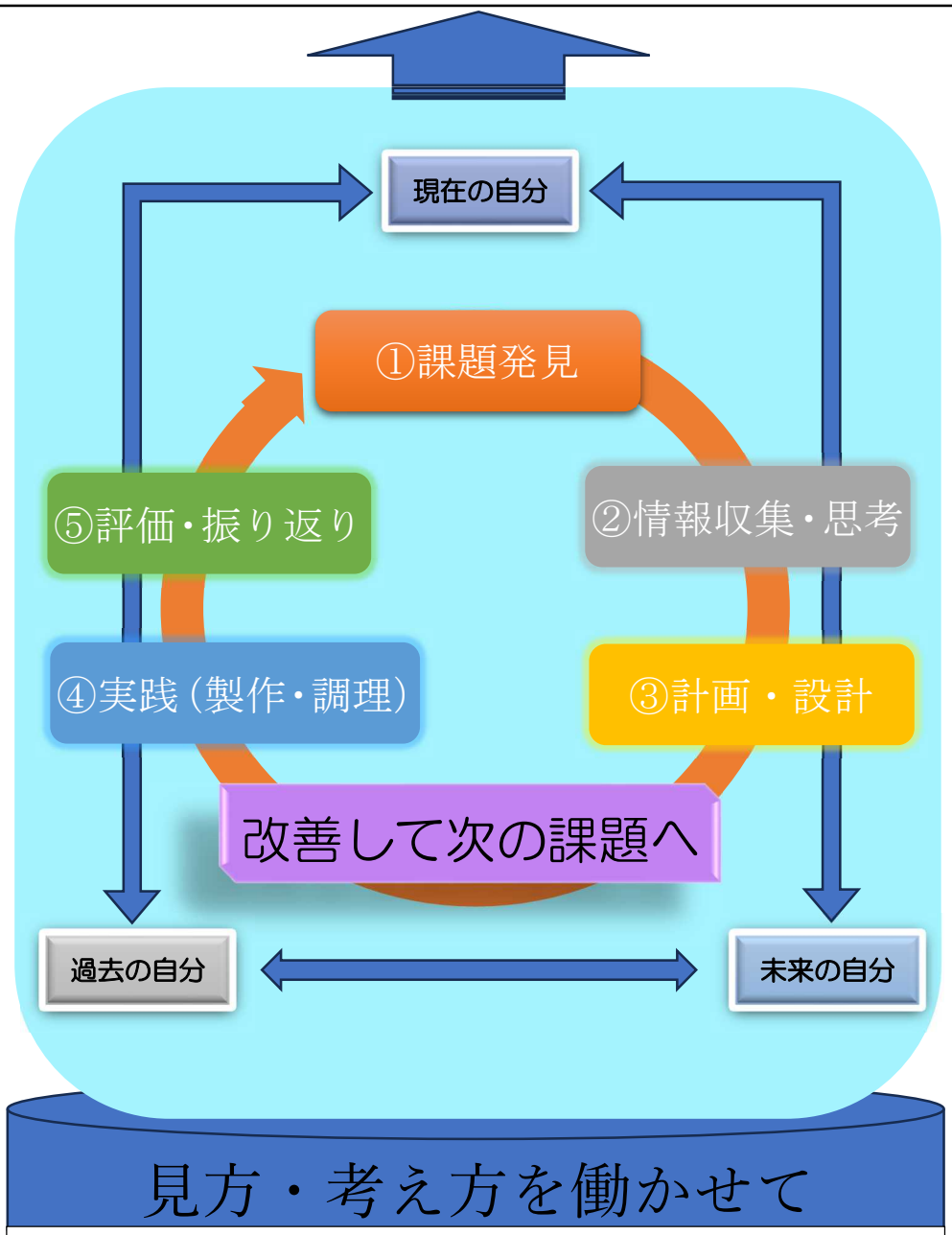
技 術 ・ 家 庭 科

技術・家庭科を通して育成する「自立した学習者」

生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を身に付ける



見方・考え方を働かせて

「技術の見方・考え方」

生活や社会における事象を、技術との関わりの視点で捉え、社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性等などに着目して技術を最適化すること。

「生活の営みに係る見方・考え方」

家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること。

≪学習方略≫

① 目標設定と見通しを持たせる
② 課題解決型学習（PBL）の導入
③ 学習計画を立てさせる
④ 振り返り（リフレクション）の習慣化
⑤ 自己評価・相互評価の活用
⑥ 試行錯誤を許容する環境づくり
⑦ ICT の活用
⑧ 生活との関連付け

実践事例１

１　題材名　自立した消費者としての消費行動の工夫

２　本校の研究と本実践の関わり

文部科学省（2021）によると、「自立した消費者」には次の３つの要素が求められる。

①被害に遭わない消費者であること

②合理的な意思決定ができる消費者であること

③社会の一員として、よりよい市場と社会の発展に積極的に関与すること

このことをふまえ、「自立した消費者」を目指すためにどのような消費行動を取ればよいかについて主体的に考え、学習できる生徒を「自立した学習者」とした。本実践では、大学生が分析・整理したデータを基にさらに追究させたり、意見交換させあったりすることで、「自立した学習者」像に迫ることができると考える。ここで使用したデータは、「衣服の製造と環境負荷」、「衣服の廃棄と環境負荷」、「環境負荷を考慮した衣服の最適な枚数」についてまとめたものである。

また、中村ら（2024）は、「自立した消費者」の資質を身に付けるためには「批判的思考力を育むこと」が必要だと指摘している。そこで本実践では、大学生が分析・整理したデータを用いて、「快適に生活するための衣服選択」と「消費生活と環境を意識した選択」のどちらを選ぶかを討論させる活動を行った。

本題材で主に働く「見方・考え方」は「持続可能な社会の構築」、「健康・快適」である。

以下は、題材構成である。

	主な内容と予想される生徒の反応	時
第１次	消費者の基本的な権利と責任について理解する。 【課題】「運動会のために購入したテントでケガをした場合、どのような消費行動をとればよいのだろうか」 ・自損事故なので、何もしない。 ・メーカーの不備があるかもしれないので、問い合わせる。	1
第２次	大学生が分析・整理したデータについて、どのような消費者の権利と責任が関わっているのかを分析する。 【課題】「大学生のデータを分析しよう」 ・衣服の生産で多くの二酸化炭素が排出され、大量の水が消費されているのではないか。 ・古着も最終的にはごみとして、発展途上国に輸出されているのではないか。 ・持つ衣服は少なくてもいいのではないか。	1
第３次	私服の購入が環境や社会に及ぼす影響について、考え、話し合う。（下線は家庭科の「見方・考え方」を示す） 【課題】「大学生の私服は20着で足りるのだろうか」 ・20着で足りないと思う。今でも20枚以上衣服を所持しているし、それらを全て使っている。一部がなくなるとコーディネートが楽しくなくなるため、<u>快適に</u>生活ができない。 ・20着で足りると思う。他国の環境の実態を考えると、<u>持続可能な社会を構築する</u>ためには、一人一人が所持する衣服の量を減らす必要があると思う。	1
第４次	自立した消費者としての責任ある消費行動を考え、将来の生活に生かせるようにする。	1

本題材は衣服の学習ではなく、「消費生活と環境」に関する学習である。自分のニーズに偏らないためにも、消費者の権利と責任を事前に学ぶことが重要である。これにより、物資やサービスの購入から廃棄までの自分や家族の消費行動が、環境への負荷を軽減し、企業への働きかけとなって商品の改善につながることを理解できる。

また、消費者の行動が社会に影響を与えていることを自覚することができる。
指導にあたっては、「健康・快適」に傾きがちな消費行動に、「持続可能な社会の構築」という視点を加えることが求められる。こうした学習を通じて、限りある資源を有効に利用できる「自立した消費者」の育成を目指した。

３　実践

題材の目標

○　自分や家族の消費生活が環境や社会に及ぼす影響について理解することができる。　（知識及び技能）

○　自立した消費者としての消費行動について問題を見いだして課題を設定し、実践を評価・改善し、考察したことを論理的に表現するなどして課題を解決する力を身に付けることができる。
（思考力、判断力、表現力等）

○　よりよい社会の実現に向けて、自分や家族の消費生活について、課題の解決に主体的に取り組んだり、振り返って改善したりして、生活を工夫し創造し、家庭や地域などで実践しようとしている。
（学びに向かう力、人間性等）

実践の内容

第１次　消費者の権利と責任について、実際に起きた事例を挙げながら学習した。
消費者としての行動が、商品の改善や救済の仕組みにつながることを学習した。

第２次　大学生が分析・整理したデータを分析し、要点をおさえた。個人で分析する生徒もいれば、グループでスライドにまとめながら分析する生徒もいた。それぞれが学びたい方法で学び、要旨を理解しようとする姿が見られた。

第３次　「大学生の私服は20着で足りるのだろうか」という課題で討論を行った。「ちょうどよい」と考える生徒は緑の画用紙、「足りない」と考える生徒は青の画用紙、「多い」と考える生徒は赤の画用紙を胸ポケットに入れることで意思表示を明確にした。

緑：20着と決めているからこそ、衣服を大切に使うことができる。
青：コーディネートを楽しみたい。服の色や温度調整も多くの枚数があると選びやすい。
赤：20着以上になると、全然着ずに捨てる服が出てきてしまう。

それぞれの色を選んだ生徒の意見

写真　討論の様子

ワークシートと授業の様子から「深い学び」を見取るためのルーブリックは、以下の通りである。

評価規準	・これまでの学習内容と関連付けて、考察したことを論理的に表現している。 ・「健康・快適」と「持続可能な社会の構築」の「見方・考え方」を対立させながら、考察したことを論理的に表現している。
A	評価規準をすべて満たしているのに加え、他の生徒の意見や発表を取り入れながら、自分の学習を振り返り、考察している。
B	評価規準のすべてを満たしている。
C	評価規準の一部のみ満たしている。

図　「深い学び」のルーブリック

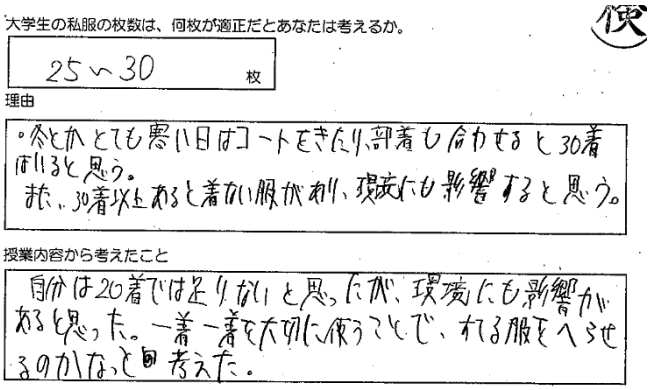
Aの評価は 31%、Bの評価は 69%、Cは全くいなかった。B が多い理由として、「情報をもとに自分の意見を固めよう」と最初に発問したことにより、他の生徒の意見や発表を取り入れにくくなり、その結果、「深い学び」につながりにくかったと考えられる。

第４次　自立した消費者としての責任ある消費行動を考え、将来の生活に生かせるように振り返りを行った。

４　成果と課題

①　「学びの往来」を実現する単元構成

本題材における「学びの往来」が見られる場面としては、次のような点が挙げられる。第一に、大学生の資料を分析する際に、個人やグループなどの学習形態を選択しながら学びを深めようとする場面である。第二に、討論の中で他者の意見と自分の意見を比較しながら考えようとする場面である。これらを第２時および第３時に実施することにより、「持続可能な社会の構築」と「健康・快適」の二つの「見方・考え方」を対立させることを促し、学習の深化に寄与したと考えられる。


大学生の私服の枚数は、何枚が適正だとあなたは考えるか。

25～30　枚

理由

・冷とかとても寒い日はコートをきたり、部着も合わせると30着ぐらいいると思う。
また、30着以上あると着ない服がふえ、環境にも影響すると思う。

授業内容から考えたこと

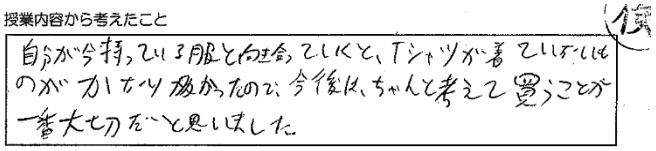
自分は20着では足りないと思ったが、環境にも影響がかかると思った。一着一着を大切に使うことで、ふる服をへらせるのかなと自考えた。

図　生徒のワークシート

図は第４時にまとめた生徒のワークシートである。この生徒は、気候を意識した快適さを重視しており、当初は20枚では不足すると考えていた。しかし、他者との学びの往来を通じて環境への負荷を減らそうとする意識が芽生えたと考えられる。その結果、最終的には当初の枚数よりも20枚に近づける選択となった。以上のことから、データ分析の段階で個人による活動のみに限定するのではなく、学習者が自分に適した学習形態を選択しながら考えることが、主体的な学びにつながると考えられる。

②「自立した学習者」育成に必要な資質・能力を身に付けるための自己調整学習

大学生の私服の枚数について考えさせた後、「中学生の自分であれば 20 枚で足りますか」と問いかけたところ、「外出することが少ないので 20 枚で十分である」や「部活動の服や制服を着るため、20 枚も必要ない」といった発言がみられた。このことは、現在の視点から過去の生活を省察し、判断の前提を意識的に調整するというメタ認知的な思考が促されたことを示唆している。


授業内容から考えたこと

自分が今持っている服と比べていくと、Tシャツが多くていらないものがかなり多かったので、今後は、ちゃんと考えて買うことが一番大切だなと思いました。

図　生徒のワークシート

図は第４時にまとめた生徒のワークシートである。授業内容を踏まえ、自分が所有する服と照らし合わせながら、今後の消費活動を検討しようとする様子がうかがえた。以上のことから、自己調整を促すためには、生徒が自分の生活に結び付けて考えられるような発問を吟味することが必要であると考えられる。

③　課題

「自立した学習者」を目指す学習活動を検討した際、ワークシートの「授業内容から考えたこと」には、「人によって考え方は異なる」と他人事のように捉えて終わってしまう生徒が多く見られた。本授業は結論を個人に委ねる構成であるため、振り返りの内容から「深い学び」に到達しているかどうかの判断が困難であった。

また、コーディネートや気候といった衣生活の「快適さ」に重点を置き、「消費生活や環境」への意識が希薄な生徒も一部見られた。学習課題を「高価なものを 20 枚以内で購入し着回すことと、安価なものを 40 枚程度購入し着回すことのどちらがよいのだろうか」と設定することで、より「消費生活と環境」への意識を高めることができたのではないかと考える。

以上のことから、ワークシート内を含めた発問や学習課題の工夫が「自立した学習者」を目指す上で必要である。

（授業者　中林　竜也）

〔参考・引用文献〕

- 中村恵美子・小原絵里・青木香保里・原田悦子(2024). 「これからの消費生活を考える中学校技術・家庭科の実践―批判的思考力を育む授業開発「成年まであと５年」―」. 愛知教育大学　教職キャリアセンター紀要第９号, （ｐ.117～123）
- 文部科学省(2021). 「これならできる！ 消費者教育 自立した消費者を育成するための主体的な学び ヒント ！ 消費者教育 &事例集」
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター(2020), 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料　中学校　技術・家庭」